

会主の町田は第三回例会をもって退会し、以後はフェノロサが会務を司ることになり、活動内容にも変化が生じた。フェノロサには独創的な画家を集めてフェノロサ自身の理想とする方向に沿って制作をなさしめ、しかるべき作品を海外で売却するという事業計画があった。そのために活動の重点を鑑定から新画批評へ移し、画家教育に主力を注ぐこととなったのである。彼は新しい日本画を生み出すことを主眼とし、そのためには洋画の長所も採り入れる必要があるという方針をとったので、龍池会幹部の多くはこれを白眼視したが、中には河瀬秀治や岡倉覚三（明治十七年一月龍池会に入会して録事となった。）のような有力な理解者もいた。そこでフェノロサは彼らと相談の上、明治十八年初頭に鑑画会の組織を改革し、会頭河瀬秀治、理事岡倉覚三、会員狩野友信、狩野芳崖、橋本雅邦等々による新しい会として再発足させたのである。ほかに在米公使九鬼隆一（嘉永五年〔昭和六年〕が名譽会頭として後援し、元老院書記官有賀長雄がフェノロサの通訳者として協力した。会の事実上の統率者がフェノロサであったことはいうまでもない。

新しい鑑画会は明治十八年一月二十五日に初会を開いた。その後、同二十一年二月二十六日の第十回まで開いたことが確認されている。毎回フェノロサは新画を懇切に批評し、また、古画を展示し、講演を行った。第七回と第十二回は大会と称する新画展覧会にあて、ここでは優秀作に賞金を与え、フェノロサが批評演説を行った。第一回大会（明治十八年九月十日〔十四日〕）の主な出品は次のとおりであった。

一等賞（十五円）鮮斎永濯「僧祐天夢ニ不動ヲ見ル図」

二等賞（十円）山本松溪「冬山暮景」

三等賞（五円）狩野芳崖「伏龍羅漢」、橋本雅邦「山駅秋色」

四等賞（二円五十銭）狩野友信「松下人物」、岡倉秋水「鷺」、端館紫川

「水中群魚」、金子玉淵「栗樹秋禽」

その他出品者 安藤広近、三島蕉窓、狩野勝玉、遠藤広宗・狩野忠信、石渡玉壺、飯島光峨、江口親雄、尾形月耕、岡梅溪、芝永章・大久保一岳、結城正明、加藤竹斎、山田成章等々。

フェノロサは情実を排し、作品そのものの良し悪しによって賞を与え、評価の根拠を明示したので、大会の評判は頗る良かった。第二回大会（後述）においてはさらにこれを上回る成功を収めることになる。

狩野芳崖

狩野芳崖はフェノロサによる日本画復興運動には欠くことのできない画家であった。両者の出会いには日本近代絵画史上、あるいはまた本学史上記念すべき出来事であったといわねばならない。その時期は、明治十七年の第二回内国絵画共進会の際とするのが従来のごときであったが、むしろ明治十五年説（山口静一著『フェノロサ』昭和五十七年四月、三省堂）の方が妥当であると思われる。恐らく明治十五年の第一回内国絵画共進会の際、顧問の任にあったフェノロサは、審査員が見向きもなかった芳崖の作品に注目し、激賞し、それがきっかけとなって芳崖が狩野友信に伴われてフェノロサを訪問し、初めて対面したのである。芳崖を知ったフェノロサは月給二



狩野 芳崖

十円を支給し、家屋も与え、フェノロサが理想とするところの絵画、つまり「画の十格」が備わった絵画を生み出すための実験的制作に専念させたのであった。

芳崖がここに至るまで

の足跡を簡単に紹介しておく、彼ははじめ父親の狩野晴卓（長州藩御用絵師）に画を習い、次いで藩費生として木挽町勝川院の絵所に入門し、修業を重ねて橋本雅邦、狩野勝玉、木村立嶽とともに勝川院門下の四天王と呼ばれるにいたった。元來進取の気性にとみ、研究心旺盛であったが、家法墨守をこととする木挽町絵所ではそれが却って疎まれ、破門されそうになったこともあるという。安政二年ごろ帰郷して蕃の御用絵師として独立。万延元年には勝川院に呼ばれて江戸城修復にともなう絵画制作に加わった。維新前後の動乱期は長府におり、明治十年に東京に移住した。例に漏れず絵師としては生計が立たず、砲兵工廠の画工になろうとしたが試験に落ち、止むなく同門の木村立嶽とともに精工社に勤め、輸出用の陶器や漆器の下絵を描いて糊口をしのいだ。赤貧洗うがごとくであったというが、彼を悲惨な境遇から救ったのは橋本雅邦であった。この親友の紹介によって島津家雇いとなり、月給二十円を支給されて「犬追物図」の制作と取り組み、漸く本業に立ち戻った。そして、第一回内国絵画共進会には意欲的に十一點も出品し、フェノロサに注目さ

れるという好運を掴んだのであった。以後、フェノロサの指導のもとに並々ならぬ努力をして日本画の近代化につとめ、また、美術学校設立運動においても重要な役割を果たしたが、その活動については追いついてゆくことになるだろう。